

アニメーションと教育 日本戦前戦後の歴史

津堅信之

(アニメーション研究／日本大学芸術学部)

1. はじめに

主な内容

- 1) 戦前から戦後にかけての教育用アニメーション
- 2) アニメは教育の妨げになるのか
- 3) 教材としてのアニメーション

以上のようなトピックで、日本における教育とアニメーションとの接点についての議論の素材を提示したい。

2. 戦前から戦後にかけての教育用アニメーション

- 国産アニメーションは1917(大正6)年から制作されはじめ、時事漫画や、「桃太郎」「カチカチ山」などおとぎ話がアニメ化されていた。
- 数年後には、教育用アニメーションの制作がはじまった。それは、
 - ・理科や算数での図解、図表などを動かす表現を盛り込んだ作品
『気圧と水揚ポンプ』(1921年)、『植物生理・生態の巻』(1922年)、
『円』(1932年)
 - ・社会マナーを教えたり、道徳教育的な目的をもったりした作品
『太郎さんの汽車』(1929年)、『瘤取り』(1929年)
- シンプルな線と絵で表現されたアニメーションの「わかりやすさ」は、初期アニメーション制作で積み重ねられ、これが戦時中のプロパガンダにつながったともいえる。

雑誌「映画教育」

- 1928年から43年まで、大阪毎日新聞社(大毎)によって刊行された雑誌「映画教育」(途中「活映」と改題、全183号)は、活字に代わる新しいメディアとしての映画の未来を捉えた。
- 教育者のみならず、文学者、映画作家、アニメーション作家まで多くの執筆者が寄稿し、また座談会やシンポジウムなどを開催した。
- 注目すべきは、村田安司、大藤信郎、北山清太郎など当時第一線で活動していたアニメーション作家がしばしば寄稿した。
- また、北山清太郎による算数教育用短編アニメーション『円』の製作を担当した。

「映画教育」1932年12月号

・本文より

算術科におけるフィルム使用の目的について

A 実験で理論的に、的確に行かぬところを映像によって表現し理解を助けること

B 動く画により全てが鮮明であり印象が強くて記憶度が高い

C 時間の経済となり問題練習を充分にし、より高度の学習が出来る

以上の三項目におけることによって遅滞児は救済せられ、優秀児には各部面においてヒントを与えてより深い学習への道程を進ませることが出来る。

算術

待望久しく「圓」について完成 教科用フィルムとして 理論と製作過程の諸問題

フィルムによる効果ある指導が目的

―かゝる論據に私は基く―

大阪府立天王寺師範 北野 藤 治 郎
大阪府立天王寺師範 北野 藤 治 郎

教育とフィルム

活動寫眞は教育を對象として生れて來たものでもなければ教授の手段として發達して來たものでもない。専ら娯樂のために尋常な發願をして現在の隆盛さを招來したのである。ゆゑに數年前までは教育はその目的においてもまた手段においても活動寫眞といふものを考慮に入れなかつたのである。そればかりではない。常設館における映畫の兒童におよぼす影響に對してあまりにも神經過敏であつたらむが疑の山である。

しかしながら活動寫眞そのものの發達に連れて娯樂映畫から派生した記録フィルムが出來、學術フィルムとなり、遂には教育フィルムまで製作される時代となつたのである。しかし一口に教育フィルムといつても種々態多で何れの娛樂映畫もテーマを持つ普通の映畫でハッピーエンドであり、善因果惡因應果を表現さへしてをれば部分的には非教育な點も絶無ではないにしても全體としては決して教育的でないとはいへないのである。しかしこゝでいふ教育フィルムとはそんな廣義階なものではなく、學校の兒童生徒の教育に使用するフィルムを指すのである。

教育はフィルムがなくても出来る。しかしフィルムのみが持つ偉大な迫力感化力は誰しも認めるところであつてこの力強い文明の利器を教育の手段に利用すればおそらく大きな効果を擧げ得るだらうといふ點から、學校教育フィルムがスタートして現在發達の過程をたどりつゝあるのである。

算術とフィルム

フィルムを教室にまで持つて來

これは現在では中々である。その證據には算術フィルムなるもの本もない。數年前幾何

戦後、商業用アニメの「礎」となった教育用アニメ界

- 戦後まもなく、東宝教育映画社、東映教育映画部といった、大手映画会社関連の組織が短編アニメーションを製作し、マーケットは小さかったと思われるものの、戦後のアニメーション復興と維持に寄与した。
- これらの制作活動に関わったアニメーターや監督らが、たとえば1956年の東映動画（現東映アニメーション）の設立に参加した。
- 学研映画局は、1958年からアニメーション制作を開始し、『みにくいアヒルの子』『セロひきのゴーシュ』などが、教材用として販売された。
- NHK教育放送では、1994年から放送が始まった短編アニメーション放送枠「プチプチ・アニメ」は、単に未就学児向け作品を供する役割にとどまらず、若手クラスのアニメーターのデビュー、また修行の場という意味が付与されるようになった。

3. アニメは教育の妨げになるのか

「アニメ(まんが)ばかり見ないで勉強しなさい」

●テレビアニメが急増した1960年代から言われるようになったことだが、
実際これはどういう意味か？

1) アニメばかりみると勉強時間が少なくなる

2) アニメの内容(暴力表現、性的表現、差別的表現など)が何らかの影響を及ぼす

●演者の印象では、以上の点について、アニメーションサイドからの本質的な研究や議論の必要性はあるのか。

●そればかりか、特定のアニメ作品の「影響」によって少年による凶悪犯罪につながったのでは、という言説は現在まで表出することがある。

『FUTURE WAR 198X年』騒動

●『FUTURE WAR 198X年』

(舛田利雄・勝間田具治監督、1982年、東映動画、125分)

東西冷戦をモチーフに、ソビエト連邦、アメリカ、東西ドイツ国境を主な舞台として、ドイツ国境警備にしていた兵士がワルシャワ軍に核ミサイルで攻撃、「第三次世界大戦」の勃発へと進む。

作品の舞台のほか、戦術兵器などにも実在のものを多く盛り込んだ。

内容が「好戦的」であるとして、東映動画内部から制作を疑問視し、教育関係者を巻き込んで制作反対・中止運動へと発展した。

●制作反対運動の経過

(「アニメージュ」1982年4月号)

- ・1981年2月、準備稿を入手した東映動画労組が「戦争がカッコよくしかもリアルに描かれ危険」と反発、日教組やPTAなどにも呼びかけ、制作中止運動を始めた。
- ・同年4月2日、朝日新聞は「労組が反旗をひるがえし、このほど一切の制作協力拒否を会社側に通告した」と報道。
- ・この記事を眼にした「日本母親大会」が5月、「日本子どもを守る会」や都教組など38団体160人が集会を開き、「戦争アニメを作らせないようにしよう」とのアピールを採択。
- ・同年7月、「『198X年』」に反対する会が結成され、運動が続けられた。

●制作側の動き

・監督の勝間田具治の発言

「絵コンテをやってて最初に感じたのは、戦争の犠牲者はいつも庶民だなということ。だから、当然、テーマは反戦になります。(中略)彼ら庶民が戦争にまき込まれる悲しさ、そして彼らが立ち上がらなければ戦争をとめられないということを描きたいのです」

・製作総指揮の渡辺亮徳の発言

「われわれが強調したいのは、『198X年』は「未来」の物語なんだということです。つまり、未来の話というのは、民族主義とか国境とかを越えたところでしか成り立たない」

・組合が制作をボイコットしたため、大半が外注スタッフによって作品は完成、公開(82年10月)された。

3. 教材としてのアニメーション取り込み

●情報誌「形 forme」でのアニメーション特集

・教科書用図書出版社の日本文教出版が刊行する「図画工作・美術」用の情報誌の2016年6月刊行号(No.310)で、特集「形を動かせ」が組まれた。

・演者へのインタビュー記事では、「アニメーションの原理」「実写と比べた場合のアニメーションの魅力」「動きが言葉になる」といったことが話題になった。



- 現在は、特殊な機材やテクニックがなくても、「動かす」「記録する」こと自体は簡易にできる。
- ただし、その「できる」ことについて、大人と子どもとの理解はまったく異なる。（「アニメーションを作るのは大変だ」と大人は考え、必死でメモを取るが、子どもは何をどう説明しても、どんどん忘れる）
- アニメーションの特性とか教育的効果という前提をなくして、まず作らせ、「何ができあがるか」を収集・分析すること。